

「持続可能な未来のための世界観の变革」と 「対話の役割」(要旨)

アジザン・バハルディン

《人間中心》から《生命中心》へ

持続可能な未来のためには、私たちの世界観を変えなければなりません。世界観とは、ある社会の信念体系であり、これによって、資源をどのように、そして何を目的に使うのかが選択されるのです。

現代社会を支配している世界観は、科学に示されるように、人間を「自然の一部」ではなく、自然と切り離された存在と見なす《人間中心》の見方です。そして、

機械論的哲学が科学的なものの見方と資本主義の経済システムを押し進め、両者は資源の枯渇を促進させただけでなく、貧富の差を拡大させてきました。世界の20%にあたる富裕層が80%の資源を使い、80%の貧困層の人々には20%の資源しかありません。しかも、この20%の資源には、生きる上で最低限必要である安全な飲み水すら含まれないこともあるのです。また貧困層の人々は、社会的な面でも、教育を受けられないといった人間性の否定にさえ導くような不平等にも苦し

んでいるのです。

環境危機や気候変動などに関する私たちの科学知識も、極端な資本主義 (extreme capitalism) の失敗も、ともに「我々は新しい世界観をもたねばならない」ことを指し示しています。つまり、もし持続可能な未来へと進みたいのであれば、地球における我々人類の存在に關して、よりバランスのとれた世界観が必要なのです。この新しい世界観は、人間が自然の道 (nature's ways) を尊重することを強調する《生命中心》の世界観と呼ばれます。この自然の道とは、まさに科学研究の対象であり、科学的法則とされているものそのものではありません。

「自然」——そこには我々自身の身体や心、精神も含まれます——への尊敬や愛情もまた、文化や宗教の領域に関わります。ほとんどすべての文化や宗教は、自然に対する倫理の伝統をもっています。その伝統には、自然の中の「もの」や「現象」がもつ人間にとっての象徴的意味をはじめ、人間が自身の内と外にある自然の多様な側面と要素をどのように扱うべきかで、多

くの要素が含まれています。

多様性に満ちた人類家族

持続可能性に向けて世界的な行動をとろうとする時、文化間・宗教間の差異が問題になるかもしれないと言う人もいます。しかし、今日では、そのような心配をする必要はもはやありません。なぜなら、私たちには国連の地球憲章があるからです。

地球憲章の前文には「私たちは今、人類が自分たちの未来を選択しなければならないという、地球の歴史上重大な転換点にさしかかっている。世界がますます相互依存を強め、他からの影響を受けやすくなるにつれて、未来には大きな希望と同時に、大きな危険が存在している。私たちは未来に向かって前進するためには、自分たちは、素晴らしい多様性に満ちた文化や生物種と共存する、ひとつの人類家族であり、地球共同体の一員であるということを認識しなければならない」(地球憲章委員会日本支部訳)とあります。

「より高度な生き方」への変動が始まっている

この地球共同体を成り立たせ、きちんと機能させるための装置こそ「対話」です。“Dialogue”（対話）という言葉は、ギリシャ語の“dia”（く）を通して／分かち合つてと“logos”（言葉）からきています。対話とは、言葉を分かち合う両者が、直面している問題（群）に光を当て、その解決策を見つけようという試みなのです。対話をする時は、互いに相手から学ぼうという姿勢が要ります。また対話の目的は、最も効果的で多くの人が納得する行動への道筋を見つけることです。

対話研究所 (Dialogue Institutes) 国際ネットワークの創立者であるレオナルド・スウィドラー氏は、こう述べています。「第三の千年」の初めには、文化的・宗教的衝突が頻発した。しかし同時に、人類は今、コミュニケーションと対話を基調とした、より高度な生き方へと、深く革命的な変動を経験している最中なのである。今こそ人類は対話の力に目覚めなければならないのだ」

実際、持続可能な未来のためには、自然科学者は人文科学者と対話しなくてはなりません。現代では細分化されている（人文科学の）各分野との対話です。そして文化間・宗教間の対話が不可欠であり、それによってはじめて、互いの差異を尊重しつつ、人間行動の基礎となりうる「共通の倫理・道徳原則」を次第に明らかにすることができるようになります。幸いにも、すでに私たちの身近にある優れた情報通信技術を駆使することで、そのような対話を実り豊かに実行できます。なかんずく、私たちが今直面している環境危機については、「あたうる限り、すみやかに」行動しなければならないのです！

(Azizan Bahaudin／文明間対話センター前所長)